

観音



平成14年3月
第36号

発集発行

町中府郡芸安島
4-8-2丁目2番地
寺観正 宗言真
行真出小

顔の化粧はすぐ出来るが

心の化粧は一生涯かかって

なかなか出来ない

「どう生きる?」

誰だって、好きなように生きたいし、そうできたらきつと幸せ一杯でしょう。いろいろななんでも「これは、すべきことか、すべきではないことか」なんて考えて行動していたら窮屈で仕方ありませんね。

でも「いつも好きなように生きていたら、きつと生活に歯止めがなくなり、だんだらと流されてしまうのではないか」という心配も起こります。

ですから「好き」で生きるべきか、「べき」で生きるべきか? どちらがいいのか悩むのです。そしてその狭間で右往左往しますので人間として成長していくのでしょうか。

「好きで生きる」と実に気分がいいし、好きこそ者の上手なりで、物事が身につきやすく、前向きになり創造的になれますが、その反面、楽ばかり求めるようになり忍耐力が乏しくなり、対人関係も薄くなりがちです。

「すべきで生きる」と社会に適応しやすく、人から信頼されますが、少々消極的で自分の判断が正しいかどうか迷い周囲を気にすることでストレスも溜りやすくなるかもしれません。

どちらの思考にもプラス、マイナス面があり甲乙つけがたいのです。

要するに、どちらにも偏らず、その時その場で臨機応変に選択するのが賢明のようです。それには、今一度深呼吸して心を落ちつかせるのが一番ですね。

寺社散策

もともとは白島で一二〇〇年の歴史を誇っていた『正観寺』は、原爆で堂が焼失し住職も亡くなってしまったため、その歴史に幕を降ろそうとしていた。それを既のところで救った祖父の遺志を継ぎ、地域への奉仕に心血を注ぐ現住職の小出真行氏。小出住職はまた『中央正聖愛育会 金剛保育園』の園長や地元の保護司も務め、子どもたちの明るい未来を育んでもいる。そんな多忙な住職に、本日、俳優の小倉一郎氏が直撃インタビュー。

.....

先の見えない現代において

『心の癒し』と寺の役割

小倉 住職は『正観寺』の何代目にあたられるのですか。

小出 二十五代目です。『正観寺』は開山して一二〇〇年という由緒ある寺で、もともとは今の白島にあったのですが、戦時中

の原爆投下により建物は焼失、住職も亡くなってしまいましたね。それを誰かが継がねばならない、ということ私の祖父が六十四歳のとき手を挙げたのです。祖父は、どうせ始めるのなら自分の土地でと考え、昔代官だった先祖が遺したこの土地に、昭和三十七年小さな堂を築きました。それが現在の『正観寺』の原型です。

小倉 こちらに再開山したわけですね。住職が後を継がれるまでの経緯は？

小出 私は中学を卒業すると高野山へ行き、高校・大学を卒業し修行を終え高校で教鞭を執っていました。二十八歳のときこちらへ呼び戻され、正式な住職となったのです。それと同時に保育園も始めました。昭和五十六年四月一日開園でしたから、もう二十一年も前のこととなります。

小倉 保育園を設立されたきっかけは？

小出 少子化が叫ばれて久しい現在とは対照的に、当時は子どもが多すぎて受け入れ施設が不足していました。そして、そのことで行政も町も頭を抱えています。私で力になれることはと考えたとき「保育園を

作ろう」と思ったのが、そもそのきつかけです。

小倉 住職は今、どのくらいの割合で園を訪れているのですか。

小出 毎日です。私には、将来を担う大切な一三八名の園児と、その育成に尽力してくれているスタッフを守る責任がありますので。朝、園児たちに向けて話をし、それから寺の方の勤めに出、夕方頃再び園に戻る。というのが私の日課となっています。

小倉 無差別に人を殺めたりなどする凶悪な事件が多発しているので、余計に心配ですよね。そんな現在の世の中について、住職はどうお考えですか。

小出 そうですね。まず、自分の行動に責任を持ってない人間が増えているのでは、と思います。また、そういった人間が犯罪を起したとき、それを周囲のせい、社会のせいと他のものに責任転嫁して報道するマスコミに対しても、同じ様な無責任さを感じずにはいられません。

それもこれも、最近、子どもに「人に迷惑を掛けてはいけない」などの当たり前の

ことを教える大人がいなくなったことが原因なのではないか、と思います。幼い頃受けた教育は、大きくなってその人間の潜在意識に働きかけ、人生に大きな影響を及ぼします。それだけ教育というのは大切で、大変なものという認識を持って、私たちは教育に携わることになっています。

小倉 では、『中央正聖愛育会 金剛保育園』では、どのようなことに重点をおいた保育を行っているのでしょうか。

小出 私たちは「周囲に感謝の気持ちを持つ子どもに育てたい」という思いを軸にスタッフ一丸となって、懸命に活動しています。園の屋上にはお大師様の小さな像をお祀りしているのですが、子どもたちは皆、仏の子としてその前で「私たちよい子は一生懸命頑張ります」と手を合わせる事ができるんですよ。

小倉 他にも、地域で色々な役目を担っておられるとか。

小出 はい。以前は民生委員をしていたのですが、今は保護司として、広島で近年問題となっている暴走族の少年たちの更生な

どを担当しています。また、老人会などの集まりに呼ばれて話をすることもあります。

小倉 精力的に頑張っているらっしゃるのですね。最後となりましたが、今後、住職が目指されているお寺の形などありましたらお教え下さい。

小出 身体の癒しを受け持つ施設というのはたくさんあります。しかし、心の癒しを受け持ってくれる施設というのはなかなかありません。ところが寺は昔から各地に点在し、人々を慰め励まし支える役目を果たしてきました。その「癒しの力」は、先の見えないこんな時代にこそ発揮されるべきもの、と思っています。ですから、誰もが人間らしく生きられる社会を目指し、地域に根ざし開かれた寺作りに、これからも力を尽くしていきたいと考えている次第です。

小倉 本日はありがとうございます。

(二〇〇一年十一月取材)



●「最期によかったと思えたら大往生」

物質的に豊かになった今、

心の豊かさを求めて――

▼住職として園長として、また保護司として多忙な日々を送る小出真行氏。その中でも特に私は、犯罪者の改善・更生を助け、犯罪の予防にあたる「保護司」という役目を担う氏の話に共感を覚えた。

▼「暴走族の少年たちって恐いイメージがありますでしょう。でも集団を崩し一人一人と話をすると、普通の少年と変わらないんですよ」と語る小出住職。生きていれば色んな辛いこと、悲しいことが訪れる。しかし、心が成長しきっていない子どもたちにとってはそれは苦痛としか思えない。そんな彼らの話を聞き、道を示すことで自立を促し、生きることの喜びを教えるのが、保護司としての住職の仕事なのだ。

▼さらに住職は続ける。「正しく生きるというのは、聖人君子であれ」というのとは全く違うんですよ。間違いを修正しながら、

一歩一歩進んでいくのが本当の人間らしい生き方だと私は思います。人生は一度きり。自分の信じるものを目標に定めて着実に歩み、最期を迎えたとき、自分の人生を振り返って少しでもよかったと思える人生を、皆に生きてもらいたいと心から願います。

▼物質的な豊かさを追求して歩んできた戦後の日本社会。それが達成された今、私たちが必死で追い求めているのは心の豊かさかも知れない。「先のことは見えないから分らないが自分を信じて歩めばいい——」という住職の言葉に、私は極楽を見た気がした。



「如是我聞」

お経は、この文句から始まるものが大変多くあります。

「是^かくのごとく我れ聞くへこのように私はお釈迦さまより聞いた」と始まり、次にお釈迦さまの教えが説かれます。

勿論、お経はお釈迦さまが書いたもので

はなく、弟子たちが耳で聞いたことが語り継がれ、後に文字に示されたものです。したがって教えを受けた弟子たちの聞き語りの形式をとったわけですが、「如是我聞」とは、それだけの意味ではありません。

お釈迦さまのずっと後代の方が書いたお経でも「如是我聞」から始まるのは、それを書いた人が「今わたしは、お釈迦さまが教えを説きはじめておられるのを、このようにまのあたりに聞いている」と思っ書かれていくからです。

それは、お釈迦さまの言葉を正しく伝えてゆくことでもあります。お経は伝承や語録ではありません。書く人、読む人、聞く人それぞれが自分の体験すべき世界、それがお経なのです。お釈迦さまの声をじかに聞くそれが「如是我聞」なのでしょうね。



参加者募集

一、平成十四年四月十五日(月)
 ~十七日(水)二泊三日
 『小豆島巡拝』
 費用 三六、〇〇〇円

二、平成十四年七月二日(火)
 ~三日(水)一泊二日
 『石鎚山参拝』
 費用 三三、〇〇〇円

※お問い合わせ
 ○八二一二八二一五六六二迄

○平成十四年度 年間行事予定

- 一月一~三日 修正会
- 一月 十八日 初観音
- 二月 三日 星祭
- 三月 十日 観音大祭
- 三月二十一日 春季彼岸
- 四月十五日~十七日 小豆島巡拝
- 七月二日~三日 石鎚山参拝
- 八月 十八日 地藏祭
- 九月二十三日 秋季彼岸
- 十二月三十一日 年越し祭